

年数が経つにつれて、「不思議な連帯間」と「暗黙のルール」

国際医療福祉大学院 作業療法士学分野 M1 大場 和美

「子宮口をやわらかくする薬です」「血管確保の点滴をします」・・・。
勝村先生から、この言葉をうかがっているうちに、ちょうど20年前の病室でのやり取りが浮かびました。
私も、全く同じ言葉を確認に聞き、数時間おきに薬を飲み、よくわからないままに予定日の前日にこどもを産むことになりました。

忘れていた記憶が次々に蘇ってきます。
里帰り出産で、ほとんど馴染みのない田舎の小さな病院での出産になり、とても不安でした。薬があまり効かず夕方までに生まれなかったので「明日にします」と言われ薬を一旦中止したのですが、夜中に急に強い陣痛が始まりました。看護婦さんも1人しかおらず、先生も来ず、「まだ生まれるはずはないから」と分娩準備もしてもらえず、初産でなにもわからない私と主人は「これくらいで痛い、って言うてはいけないんだ」と思い、とにかく病室で耐えていました。痛みは急激に激しくなり息が吸えずに痙攣がおき、私は意識がなくなってしまいました。

次の記憶は、いつのまにか移動していた分娩台の上で誰かがお腹の上に乗っているところです。ぎゅうぎゅう、お腹を押されていました。ぼんやりした記憶で、痛みや苦しさや不安が一緒になってあまりはっきり覚えていません。立ち会う予定だった主人がいなかったのが不思議でした。

こどもは無事生まれましたが、私は自分の思い描いていたものとあまりにも違う出産にととても戸惑っていました。聞いていた経過と全く違っていたし、看護婦さんは全然来てくれなかったし、先生もいなかった・・・。

でも、聞けませんでした。
若い私は、深夜に産気づいた自分が悪いのかと思ったし、お産が下手だったのかと思ったし、何より無事子どもをとりあげてもらったのにケチをつけてはいけないような気がしたからです。けれど、自分にとっては決して幸せな思い出ではなく、全く思い出すことはありませんでした。

当時、私は脳性麻痺のお子さんたちのリハビリテーション病院に勤務していました。多くのお母さんたちが、出産時のトラブルに対して苦しんでいました。

長い裁判を続けている方もいらっしゃいました。

今思えば、当時私は自分の経験と医療者としての立場を、うまく整理できていなかったのだと思います。毎日見聞きしていた経験が自分にも起こるのだ、ということを実感として捉えられなかったのだらうし、同じように不安な出産を経験した母親とし

ては職場に戻ることはできなかつたのだらうと思います。自分自身を守ろうとして、無意識のうちに記憶を封印してしまっていたのかもしれませんが。

勝村さんのお話をお聞きして、少し混乱しています。
私は出産トラブルで障害を持ったお子さんや親御さんと毎日過ごす仕事をしていて、お母さんたちの苦しみもたくさん聞いていたのに、なぜ自分の身に起こった時、きちんと聞こうとしなかつたのだらうか。自分こそ、自分に起こったことやされたことをしっかり聞いて、不本意だったことをきちんと伝えて、今後はそんな思いをするお母さんやこどもが出ないようにするべきではなかつたのか、と自分を責めています。

おそらく、向き合えなかつたのだと思います。私は弱かつたのです。
でも、20年も経ってしまいましたが、今思い出し、考えることができよかつたです。少しつらい夜になりましたが、必要なことでした。

医療者と患者は、パートナーであるべきだと思います。
みんなそれはわかっているのだと思います。最初から患者さんの上に立とうとか、隠し事をしよう、とか思っている医療者はいないと思います。

でも不思議なことに、だんだん年数が経つにつれて、不思議な連帯間を持っていくような気がします。「そうは言っても、自分たちも大変なんだから。自分たちも守らないとやっていけないよね」というような。暗黙のルールのようなものがあるような気がします。

実際、今の職場では「ケーススタディ」をこの数年行っていません。なぜか、と上司に問うと、「うまくいかなかつたケースをとりあげると、担当していた人がモチベーションをなくすから」だそうです。私は、そんな人はこの仕事はやめた方がいい、向いてない、と思うのですが、「そんなことを言っていたら、みんなやめてしまう」と言われました。

世の中は「ライフワークバランス」という言葉が行き交い、土日休み、5時の定時帰宅が推奨されています。少子化で人手が減り、ゆとり教育で厳しさに慣れていない若者が多く、少しでも厳しいことを言うと「パワハラ」と言われてしまい、どう後輩たちを育てていいのかわかりません。その中で、技術と心を伴った医療の質を確保していくのは、現実的にはとても大変なことです。

私たちは、何から始めていけば良いのでしょうか。医療従事者として、また自分自身も当事者になりうる国民として。

とても大きな課題をいただいた日となりました。
勝村さま、奥様、そして星子ちゃん、ありがとうございました。
一生懸命考えます。